

「平和の文化」と蘇りのまち・館山ものがたり

千葉県館山市は、古くから「安房国(あわのくに)」と呼ばれる房総半島南部の中心地である。地図を南北逆さに見てみると、弧を描いた日本列島の頂点に位置している。豊かな自然や歴史文化に恵まれ、アジア太平洋世界とつながってきた「館山まるごと博物館」を旅してみよう。

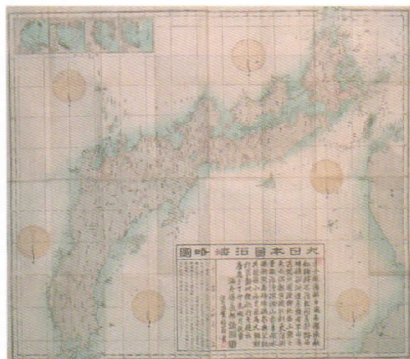
豊かな生態系に恵まれた館山だが、地殻変動の影響を大きく受け、日本で最も隆起した地質遺産の多いジオパークといえる。

地震や津波を乗り越えた絆と教訓は、信仰や祭礼とともに継承されている。西方浄土に霊峰富士を拝む信仰の地であり、多くの文人墨客に愛されてきた。海辺の癒しの地として、多くの医療伝道者も転地療養を支えた。

日本初の重要文化財となった青木繁の『海の幸』は、マグロ漁で栄えていた漁村で描かれた。風光明媚な布良は、神話のふるさとであり、美術界の聖地とも呼ばれている。曲亭馬琴の長編小説「南総里見八犬伝」のモデルになった大名・里見氏は、170年にわたって安房を治めた。多くの山城を築き、なかでも館山は、交易の湊をもつ城下町として発展した。

海洋民が交流・共生をしてきた歴史文化は、ハンブル「四面石塔」や、朝鮮人海女の墓、遭難救助の碑などの史跡に見ることができる。その地理条件から、海上交通や近代水産業の発展に関わる拠点となり、貢献してきた。器械式潜水を導入しアワビ漁に成功した漁業移民は、日米親善の架け橋となりながら、開戦後は強制収容所に移送され、本土侵攻計画「コロネット作戦」の情報収集に巻き込まれていった。

一方、戦略的拠点であった房総南部は、東京湾要塞から本土決戦の帝都防衛を担い、重要な戦争遺跡が多く残っている。終戦直後には米占領軍が上陸し、「4日間」の直接軍政が敷かれた。戦時下においても、「平和の文化」を守ってきた人びとの物語は、今なお語り継がれ、育まれている。



「大日本国沿海略図」 勝海舟
1867(慶応3)年

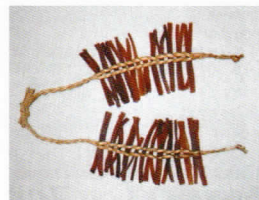


「安房国全圖」 鶴峰彦一郎
1849(嘉永2)年

海とともに生きるまち



陽光が強く、沖合に黒潮と親潮が交わる安房では、森や海で豊かな生命が育まれてきた。海に丘陵が迫り、岩礁の多い複雑な地形のため、天然の良港に恵まれていた。人びとは漁労を営み、干したアワビを税として朝廷に貢納していた歴史もある。



のしアワビ

「鏡ヶ浦(菱花湾)」と呼ばれる波穏やかな館山湾は、北限域のサンゴやウミホタル、熱帯魚などが生息している。歩いて渡れる無人島「沖ノ島」は、タカラガイやイルカの耳骨などを拾うビーチコーミングや、シーサイドセラピーが人気のスポットである。



タカラガイ



ウミホタル